

“保障”よりも“働くチャンス”を！

つい先日、大学時代の同級生から1冊の本を受け取りました。「障害者の尊厳と自立への闘い——アビリティーズ運動、チャレンジの45年——伊東弘泰」。読み進むあいだに、著者のアビリティーズ運動にかける変わらぬ情熱に胸を熱くし、勇気をもったものです。以下、特に共鳴した部分に若干の編集を加えまとめてみました。



(写真はアビリティーズ協会のホームページから)

1966年6月11日、アビリティーズ運動の最初の会社として株式会社アビリティーズ社が設立登記された。日本で最初の、心身に障害のある人々の雇用を進めることを目的とした会社が活動を始めた歴史的瞬間である。社長と従業員合わせて6人の小さな会社。日本アビリティーズ協会を発足させてわずか2か月後のことだった。

最初の事業はタイプ、オフセット印刷。10か月の月賦で買った和文タイプが3台、小型の印刷機が1台という零細印刷工場の誕生だった。たとえ貧しくとも自分たちの手ですべてを用意し、全身全霊をもって取り組んだ。工場は大田区蒲田に近い西糀谷だった。天井もなく、風向きによっては、夏の暑さで汲み取り式便所の臭気がたちこめた。

国家の補助に頼る福祉ではなかった。身体障害者の社会復帰を「社会福祉法人」ではなく「株式会社」で試みた彼らの創立を、経験深い社会事業家の多くは、注目をしながらも厳しい批判をあげていた。「協力」ということで参加した人たちも、いろいろな事情でほぼ3年のうちに手を引いていった。一時的な善意の高まりは、時間とともに簡単に失われていくことがわかった。

氏は語り続けた。「障害者も当たり前の仕事につきたいのです。できることなら皆さんの援助に頼らず仕事をし、自分で給料を得て、生活したいのです。税金で養われるのではなく、納税者の立場に立ちたいのです」。

自立を目指すアビリティーズの哲学をもとに、従業員も必死で仕事に取り組んだ。トイレで便器に座ったまま数十分も熟睡してしまったという人もいた。社長の伊東氏も連日、仕事場に泊り込み状態で、椅子を並べて3、4時間、横になるのがやっとという毎日が続いた。商談中にいびきをかいて寝入ってしまったこともあった。極限状態の事業活動が続いた。

だが、創業して3年を経過する頃から会社の経営は少しずつ着実なものとなっていった。従業員も15人ほどになっていた。とてもまだ会社といえるほどの体制ではなかったが、過去の累積欠損を償い、利益を計上するまでになっていたのである。従業員の給料も徐々に

上がり、会社も従業員も「納税者」になった。20人の株主にも1割の配当を支払えたのである。

伊東社長は日本アビリティーズ社の設立の会で訴えた。「わが社のように障害者を雇用するための特別な会社が存在するようなことは本来あるべきではありません。どの会社でも、心身に障害のある人をあたり前に雇用する社会のあり方こそ私たちの願いです。誰もが普通に働くことができるようになり、日本アビリティーズ社が解散できるような社会になることが、私たちの目的とするところです」



アビリティーズ社はその後さまざまな分野に事業を開拓していった。福祉分野でも大きな使命を担うようになった。同社が福祉機器を開発し販売する目的は、障害のある人が自立生活を確保し、家庭で、職場で、社会で、同じ市民として生きていけるようになることにあった。リハビリ機器や福祉用具は、障害があっても他者の介護にできるだけ頼らず、自身の不自由をできるだけカバーして、自立した生活を可能にすることを目標に開発されてきた。“介護”より“自立”を支援しようとする行き方は、“保障よりも仕事のチャンス”をとの精神に通じている。

半世紀前、障害者はほとんどが家に閉じこもって生活しており、街に出ることなどはなかった。たまに外に出れば人々は振り返ってじろじろと見る。小さな子供を連れた母親は「お前もいい子にしていないとあの人みたいになるよ」と、ささやいた。無垢な子供は障害のある人のことを誤解してしまう。障害者が家の座敷牢に閉じ込められていたなどということが、時おりニュース報道されていた時代だった。障害者は、社会の裏側で人目に触れぬようひっそりと生きていたのである。

こんな時代の状況下、高校を卒業したとき100社近くของบริษัทから就職試験を拒否された24歳の身体障害者が、同じ障害を持つ人たちとわずか150万円の元手で会社を興した。不撓不屈の信念と活動で、まずは印刷事業から始まり、やがてリハビリ、福祉機器、高齢者施設などの事業を開発し現在、社員1,000人の会社に発展した。社員はもとより、役員、管理職にも多くの重度障害者が働いている。そして今、障害者があたり前に社会で生きていけるよう、新しい法律を作る運動にも取り組んでいる。



☆ ☆ ☆ ☆ ☆

紙面の都合で本の後半部分が十分に網羅されていませんが、庇護を受ける立場から税金を納める立場へ、との生き方に強い共感を覚えます。次元は違いますが、現在、さまざまな事情から健常者でも生活保護を受ける人が増え財政を圧迫しています。国の仕組みや福祉の面から難しい課題もあるでしょうが、個人も行政も、是非このアビリティーズ精神を参考にして欲しいと思

った次第です。 (日本アビリティーズ協会のホームページ：<http://www.abilities.jp>)

アビリティーズの綱領

わたしは平凡な人間でありたくない。非凡な人間としてできれば、保障よりも“チャンス”を選ぶこと……これこそわたしの願いだ。

わたしは、国家に養われ、卑屈で、怠惰な人生をおくることに満足できない。わたしは、夢をえがき、計算された冒険の道を求め、建設しつづける。

——たとえそれが成功しようとも、失敗しようとも。わたしは、すばらしい人生の刺激を、いくばくかの施し物のために放棄することなどしない。わたしは保障された生き方よりも、つねに挑戦する人生を選ぶ。それはユートピアのような日々ではなく、スリルに満ちた世界である。

わたしは、決して、恩恵のために自由を、慈善のために尊厳を捨てることはしない。いかなる権力者の前でも畏怖しないし、また、いかなる恐怖に対しても恐れることはない。姿勢を正し、誇らかに、なにことも恐れず、自らの意思で決断し、行動する。自分で創造していくことを大切に考え、世間に向かってこう宣言したい。

——これがわたしの成し遂げたことだ——と。
すべての障害者のために、あなたとわたしのために、この綱領は名誉ある日本人としての道を示すものである。

一九六六年四月一七日宣言